

江戸時代 東海道随一の名園と言われていた

# 帯笑園

江戸時代から昭和の初め迄、多くの珍しい  
花卉類と書画が収集され観賞されていた。



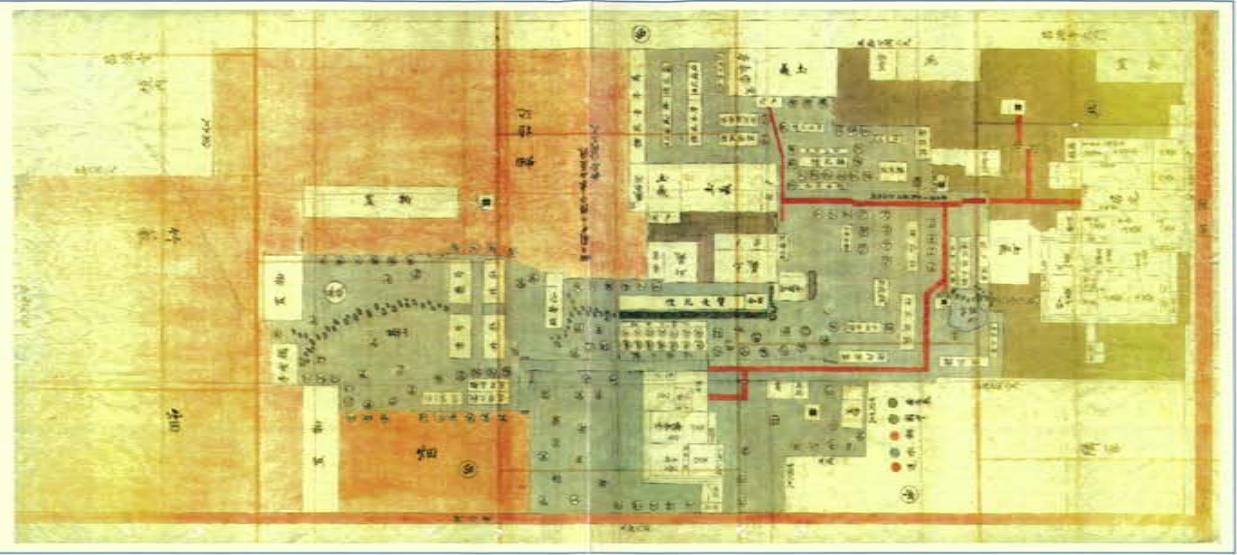
「帯笑園」の木額が掲げられた、東海道に面した門  
(明治期)

## 「帯笑園芳名帳」

帯笑園を訪れる人々はその名を芳名帳に残した。  
その中にはオランダ公使ヤン・ファン・ロボフ、十四代将軍家茂  
伊藤博文、大正天皇の名も見え。



植松家に伝わる「帯笑園絵図面」(作成年代不詳)



## 「榻錦帳」

帯笑園を訪れた文人墨客を始め、多くの人々がこの「榻錦帳」  
に書画を残している。その中には、勝海舟のものもある。



東海道本線・原駅より徒歩7分、タクシー3分  
不定期開園/お問い合わせは原地区センター TEL 055-966-0084

歴史と文化のまちづくり  
原・浮島実行委員会

事務局：原地区センター  
TEL.055-966-0084 FAX.055-966-0084

### 帯笑園由来記



植松本家の祖先は武田氏の宿将須田朝重で、武田が敗れたあと、朝重の嫡男季重が天正十二年(1584年)原に居を定めました。

爾来、開墾、植林にいそしみ、花卉類を収集し、やがて花長者と言われるようになりました。その庭は菊花園或いは植松叟花園と呼ばれ芍薬、万年青、松葉蘭、桜草の収集家として著名となりました。江戸に下る公家や大名などが立ち寄り花卉類と京の文芸文化の交換の場となりました。

六世季英蘭溪は絵画にも興味を持ちその嫡子七世季興孚丘を圓山応挙に師事させ、応挙より応令の画名を受けます。八世季服蘭丘は頼山陽、岸駒などに師事し京との関係が深まりました。この頃海保青陵により帯笑園と名付けられました。現存する芳名録や櫛錦帳には文人墨客をはじめ將軍や大名、明治政府の閣僚、皇后、皇太子などの御来園の記録があります。和蘭商館長一行と訪れたシーボルトも「江戸参府紀行」にその庭の美しさと豊富な種類の植物に感嘆したと書いています。

太平洋戦争後の農地解放と相次ぐ相続で敷地は往時の三分の一となりましたが、往事に設置或いは使用されていた品々が園に関する記録と共に現存します。これら品々を将来も敷地と共にこの場所に残したいと地区の有志が「帯笑園保存会」を立ち上げその維持保存につとめています。

帯笑園保存会 植松 善夫

帯笑園の門柱の対聯(律詩の対句)

右側 かりそめにもいやしくとも 園に入る者は一花一葉にも触れることを禁ず

左側 すべてので詩歌有るもの 必ず一吟一詠を留める事

都有詩歌者必應留一吟一詠

苟入是園者固禁觸一花一葉

園内に現存する植松叟花園記碑



皆川漢庵が一七八八年(天明六年)に撰文一八二七年(文政十年)石碑を建立

裏面には岸駒が描いた虎の絵



帯笑園の現在の録内。

### 明治初期の帯笑園の様子

オランダの学者、シーボルトを始め、当時は多くの訪問者が訪れる交流の場であり、文化の殿堂であった。



帯笑園は桜草も有名で、数百種の収集があった。

盆栽には天下の逸品と称えられるものが多く、特に松が有名であった。



往事の帯笑園の前栽。左の松は今も健在である。(上の写真参照)

